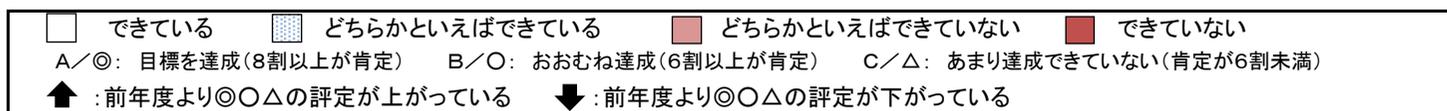
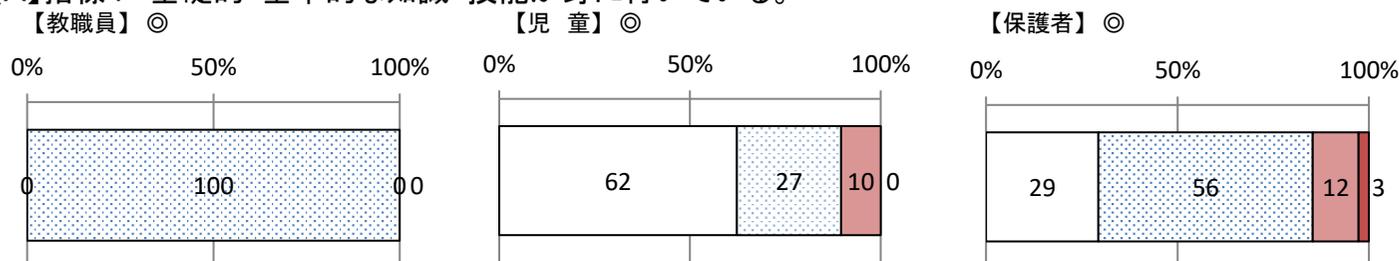


令和3年度学校評価

上島町立弓削小学校



【A】指標1 基礎的・基本的な知識・技能が身に付いている。



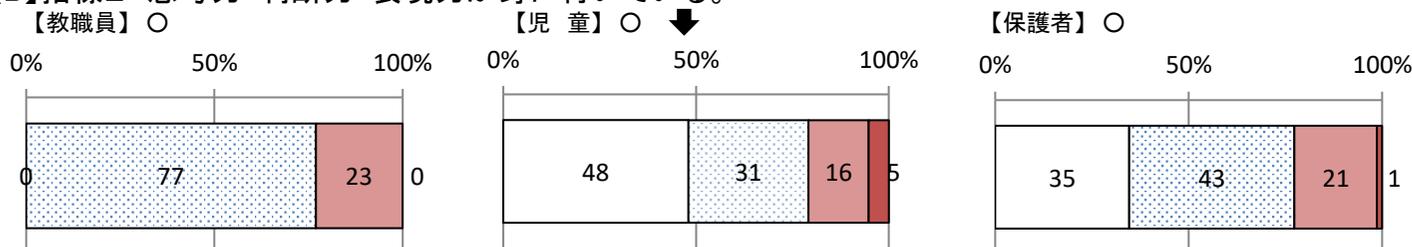
【分析】

基礎的・基本的な知識・技能が身に付いていると肯定的に捉えている教職員は100%であるが、積極的肯定意見は0%である。昨年度が8%、一昨年度は46%だったことを考えると、基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けた指導に年々困難さを感じつつあることがうかがえる。また、児童の否定意見も、一昨年度は0%、昨年度は7%、そして今年度が10%と上昇してきており、基礎的・基本的な知識・技能の定着に自信が持てない児童が増えてきていると思われる。保護者の結果は過去2年間と同程度である。

【改善方策】

基礎的・基本的な知識・技能の定着は、チャレンジタイムやiプリ、夢現塾などの継続的な活用により、ある程度の効果を上げていていると思われる。しかし、全校一斉テストで合格点に満たない児童がいるなど、十分な定着ができていないことも確かである。今後は、全校一斉テストの後にも個別の指導を継続していくとともに、結果だけではなく児童の努力も称揚していき、学習に対する自信を持たせていく指導を行いたい。また、基礎的・基本的な知識・技能の定着は、ドリルなどの繰り返し学習だけで身に付くものではない。学習への意欲や発表・話し合い・見学などの体験的な学習活動、家庭での生活習慣なども大きく関連している。これからも学校と家庭とが協力して充実した学習環境の整備に努めたい。

【B】指標2 思考力・判断力・表現力が身に付いている。



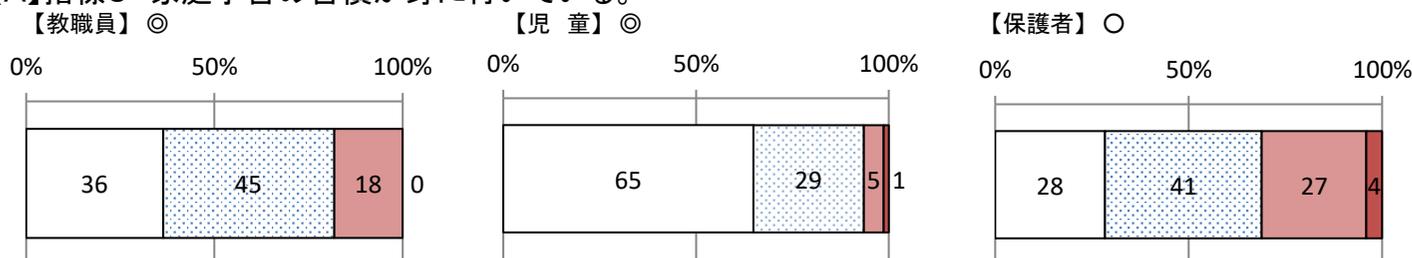
【分析】

思考力・判断力・表現力が身に付いていると肯定的に捉えている教職員と保護者の割合が昨年度よりも上がっている。今年度は新型コロナウイルス感染症対策をとりながら行事や活動を再開させてきたことが影響していると思われる。しかし、児童の否定意見が8ポイント増えており、ここでも学習面で困難さを感じている児童が多いことがうかがえる。

【改善方策】

今後も新型コロナウイルス感染症対策に配慮しながら可能な限りペアや小グループ学習を積極的に取り入れ、一人一人の児童が自ら進んで学習に取り組むことができるようにしていく。また、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、獲得した知識・技能を活用した学習（思考・判断・表現する学習など）を積極的に進め、主体的な学習となるように努めていく。加えて、タブレット端末を効果的に利用し、児童の思考や表現を引き出していくような授業改善に取り組んでいく。

【A】指標3 家庭学習の習慣が身に付いている。



【分析】

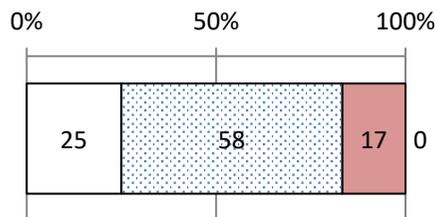
児童と保護者の割合は昨年度と同程度であるが、教職員の否定意見が18ポイント増加している。保護者の否定意見も31%に上っており、教職員と保護者が家庭学習を習慣化させることの難しさを感じていると思われる。

【改善方策】

今年度は新型コロナウイルス感染症対策のために十分できなかったが、来年度は学級PTAなどで「学習強調週間」や家庭学習について十分話し合い、保護者の意見を取り入れながら共通理解を図って取り組んでいく。そして学校と家庭が一丸となって、よりよい家庭学習習慣の確立を目指していきたい。

【A】指標4 教科等の学習において文章にまとめる、全体で発表するといった言語活動を積極的に取り入れている。

【教職員】◎



【分析】

積極的肯定意見は昨年度より16ポイント増えているが、否定意見も8ポイント増えている。積極的肯定意見の増加は学習の中で話し合いなどの言語活動を以前のように積極的に取り入れようとしていることが要因であろう。否定意見の増加は、自分の考えを書いたり、述べたりすることに苦手意識を感じている児童が増えてきており、充実した言語活動を実施できていないと捉えていることが原因であると考えられる。

【改善方策】

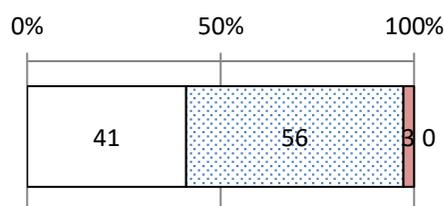
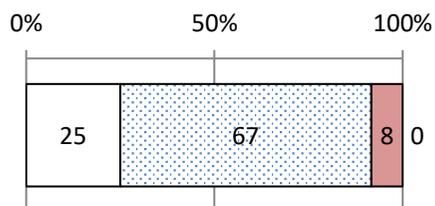
自分の考えを書いたり話したりすることに苦手意識を感じている児童が全体的に多いと感じる。書くことや話すことの指導は時間も手間も掛かり、成果もすぐには表れにくく指導に難しさがある。まずは短い時間で取り組むことができる課題（感想を述べる、日記や短作文を書くなど）を多く取り入れ、話すことや書くことに慣れさせる。そして、学年に応じたねらいを明確に定め、国語科だけでなく他の教科等でも意図的・計画的に書く活動を取り入れながら、言語能力を高めていくようにする。

【A】指標5 児童一人一人の力を伸ばすため、個に応じたきめ細かな指導の充実に努めている。

【教職員】◎

【児童】◎

【保護者】◎ ↑



【分析】

教職員の積極的肯定意見が12ポイント増加し、肯定的に捉えている保護者が97%（17ポイント上昇）に上った。教職員と保護者が協力して児童一人一人の特性に応じた指導を試み、積極的に実践していることが分かる。今後は、個に応じた指導が指標1や指標2と結び付き、成果を実感できるようにしていく必要を感じる。

【改善方策】

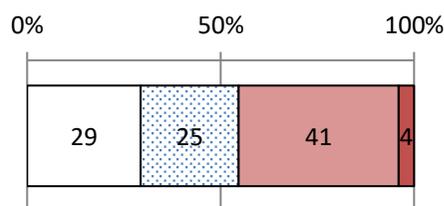
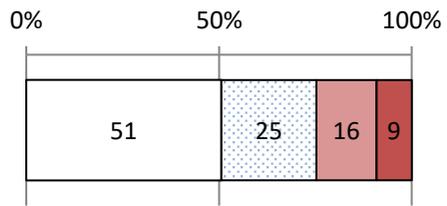
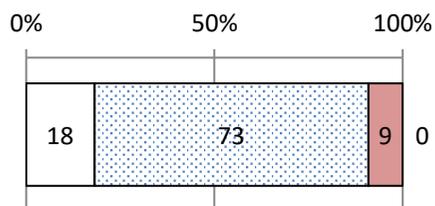
今後も少人数のよさを生かし、学校と家庭とが児童についての情報を積極的に交換しながら、一人一人の特性に応じた指導方法を模索し、根気よく継続していく。また、特別支援教育の観点からも合理的配慮についての具体的な研修を行い、教職員の指導力向上に努めていく。

【B】指標6 読書習慣が身に付いている。

【教職員】◎ ↑

【児童】○ ↓

【保護者】△



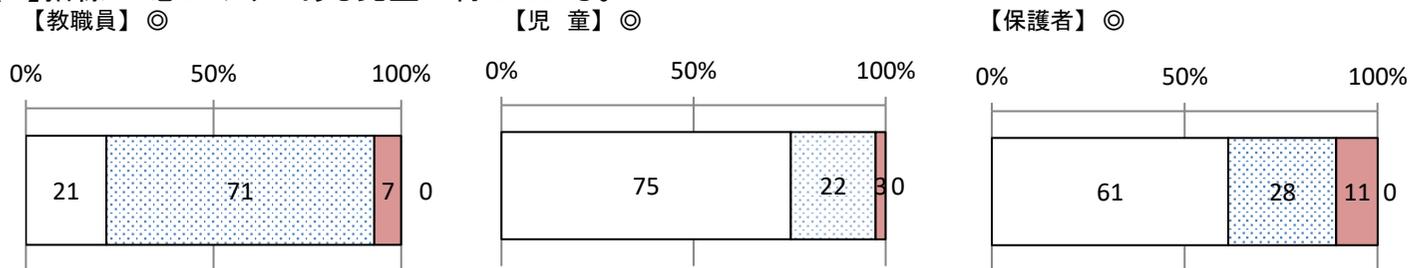
【分析】

教職員が肯定的に捉えている割合は46ポイント増加しているが、児童の否定的に捉えている割合は8ポイント増加している。保護者の否定的に捉えている割合も45%と高く、全体的に読書習慣が身に付いているとは言い難い。学校の読書の時間や自習の時間、図書室を利用する時間などではよく本を読んでいるが、あくまで学校でさせられている読書にとどまっており、家庭での読書や自主的な読書はできていないと考えられる。

【改善方策】

まず本に対する興味を持ってもらうために、児童が手に取って読んでみたくなるような本を積極的に購入していきたい。また、愛媛県立図書館の貸出図書を活用して学級文庫に配置するなど、様々なジャンルの本に触れ合うことのできる環境を整備する。低学年の児童は、よく図書室を利用しているが、学年が上がるにつれて利用数や読書数が減る傾向にある。特に高学年においては、興味が多様化し、家庭においても読書の時間を確保することが難しくなっている。また、どんな本を読んでもいいのかわからないという児童も多い。今後は適切な選書の仕方を指導していくとともに、家庭でも親子で読書する時間や絵本を読み聞かせる時間などをつくっていただきながら、学校と家庭とが協力しながら読書の習慣化を図っていきたい。

【A】指標7 思いやりのある児童が育っている。



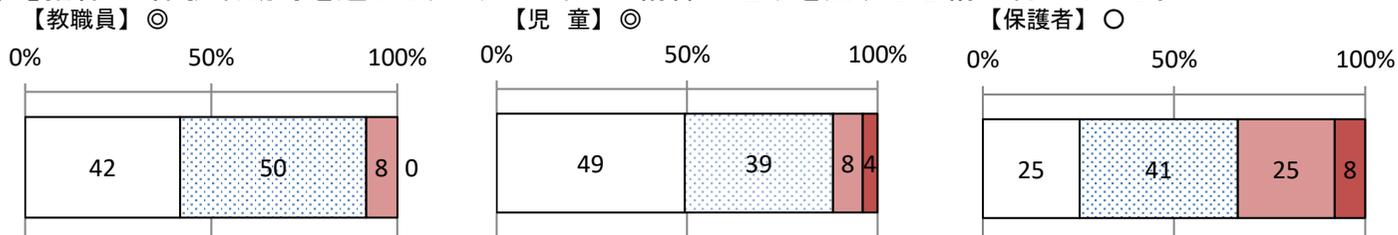
【分析】

昨年度と比べて教職員の否定意見が7ポイント増加、児童の否定的に捉えている割合は6ポイント減少、保護者の積極的肯定意見は16ポイント増加、同じく保護者の否定的に捉えている割合は7ポイント増加している。児童間ではあまり気にならない言動も、教職員や保護者の大人から見ると問題に感じていることが多いのではないだろうか。大人が過敏に捉えすぎているところもあるのかもしれない。または児童自身が思いやりのある言動ができていると勘違いしており、自分を客観的に見詰めさせる指導が不足しているとも考えられる。

【改善方策】

まずは思いやりのある言動ができていると児童自身が感じていることをよい傾向であると捉えたい。その中で、児童のよさを認めたり、励ましたりする指導を引き続き行っていく。また、よくない言動を厳しく叱って終わりにするのではなく、どういうところがよくなかったのか、これからどうしていくのかなどについて、児童が指導を受け入れ、納得し、自ら改善に向かうような指導を意識していくことで、更に思いやりのある言動ができる児童を育てていきたい。

【A】指標8 体験活動等を通じて、ボランティアの精神や地域を愛する心情が育っている。



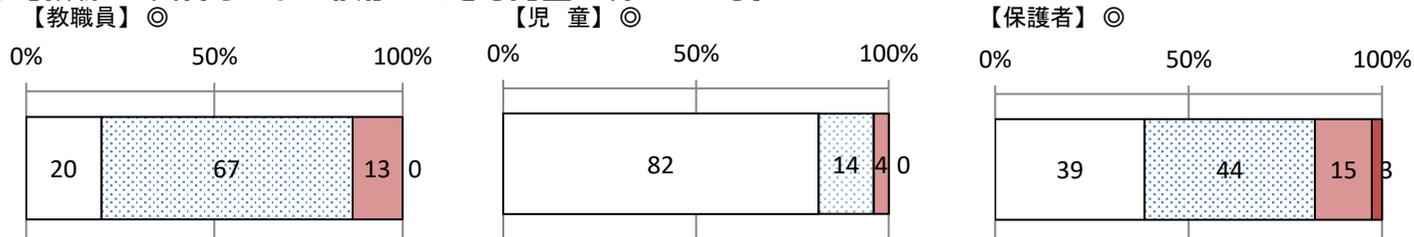
【分析】

教職員の肯定的に捉えている割合は7ポイント増加しているが、保護者の肯定的に捉えている割合は6ポイント減少している。児童の割合は大きく変わっていない。昨年度は、県のへき地・地域教育研究指定校として積極的に進めてきた地域学習が新型コロナウイルス感染症の拡大により大きな影響を受けた。本年度は少しずつ実施できるようになり、教職員は手応えを感じてきていると思われる。しかし児童や保護者が実感できるところまでには至っていない。

【改善方策】

今後も体験活動を積極的に取り入れ、充実したふるさと学習の実施を継続し、地域を愛する心情を育てていく。また、JRC活動や各種募金、清掃活動など、自分たちが取り組んでいることの意味や価値を意識させ、ボランティア精神を育てていきたい。

【A】指標9 気持ちのよい挨拶ができる児童が育っている。



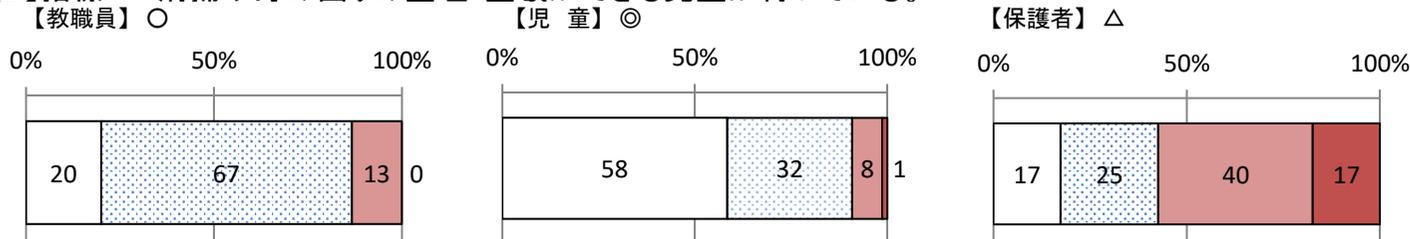
【分析】

教職員、児童、保護者の肯定的に捉えている割合が上がっている。ただ、否定的に捉えている割合が少なくない。また、積極的肯定意見の割合を見ると、児童は高いが、教職員と保護者はさほどでもなく、児童と大人との間で「気持ちのよい挨拶」の捉え方に差があると思われる。

【改善方策】

校内では気持ちのよい挨拶ができる児童が増えてきたが、地域での挨拶がまだまだできていない。地域でも挨拶ができるように指導していく。また、集団下校や友団会などの機会を通して、気持ちのよい挨拶とはどのようなものかを具体的に示したり、よくできている児童を称揚したりして、気持ちのよい挨拶についての指導を継続していく。

【B】指標10 清掃や身の回りの整理・整頓ができる児童が育っている。



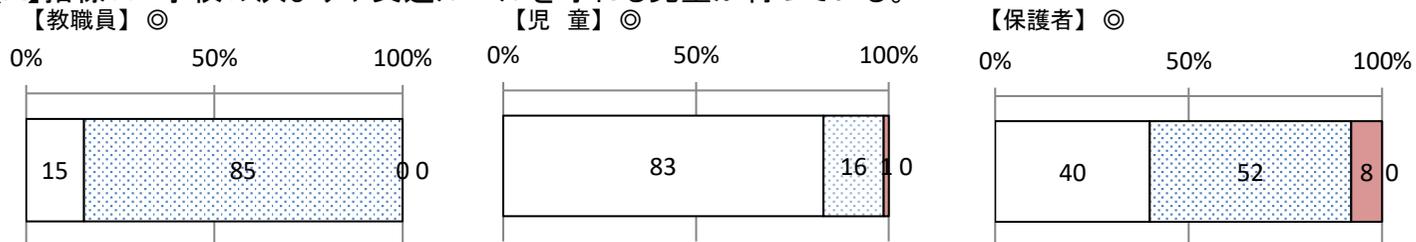
【分析】

全体的には改善傾向が見られるものの、保護者が否定的に捉えた割合は57%に上り、アンケートの中で最も高い。一方、児童の肯定的に捉えた意見は91%と大変高く、保護者と児童の捉え方に大きな差が見られる。また、教職員の否定的に捉えた割合も16ポイント減少している。学校ではある程度できているが家庭では整理・整頓があまりできておらず、整理・整頓の習慣化が図られていないことがうかがえる。

【改善方策】

一生懸命清掃に取り組む児童がほとんどであるが、身の回りの整理・整頓については個人差が大きく、家庭での過ごし方とも関係が大きい。整理・整頓の仕方が身に付いていない児童に対しては、どうすればよいのかを具体的に示しながら継続した指導を行っていく。家庭とこまめに連絡を取り合いながら、片付けの見届けをしっかりと行い、整理・整頓が習慣化することを目指して粘り強く指導していきたい。

【A】指標11 学校の決まりや交通ルールを守れる児童が育っている。



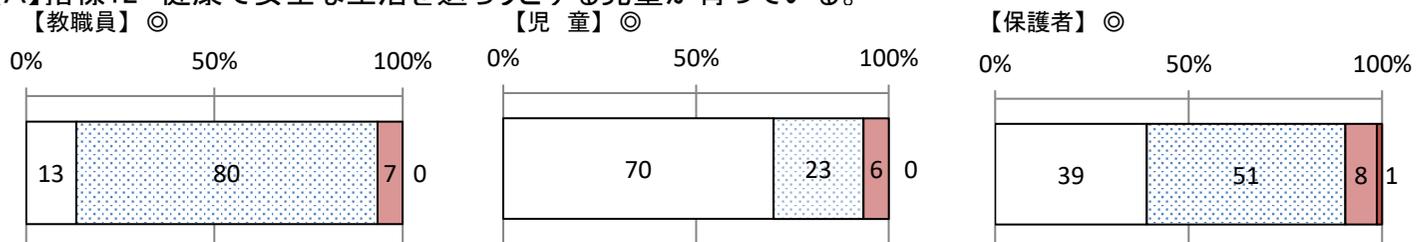
【分析】

教職員と児童のほぼ100%が肯定的に捉えており、学校の決まりや交通ルールを守っていると考えている。教職員の否定意見は14ポイント減少して0%となった。しかし、積極的肯定意見だけを見ると、児童と教職員の割合には大きな違いが見られる。児童は決まりやルールをしっかり守っていると思っているが、教職員や保護者は十分ではないと感じている。ここに大きなずれがある。

【改善方策】

学校の決まりや登下校時の交通ルールを繰り返し指導し、児童の社会性を育てていくようにする。また、下校時や休日の過ごし方については、保護者から積極的に情報を集め、決まりに反する行為があった場合には、機を逃さず教職員と保護者が共に指導し、児童の規範意識を高めていきたい。

【A】指標12 健康で安全な生活を送ろうとする児童が育っている。



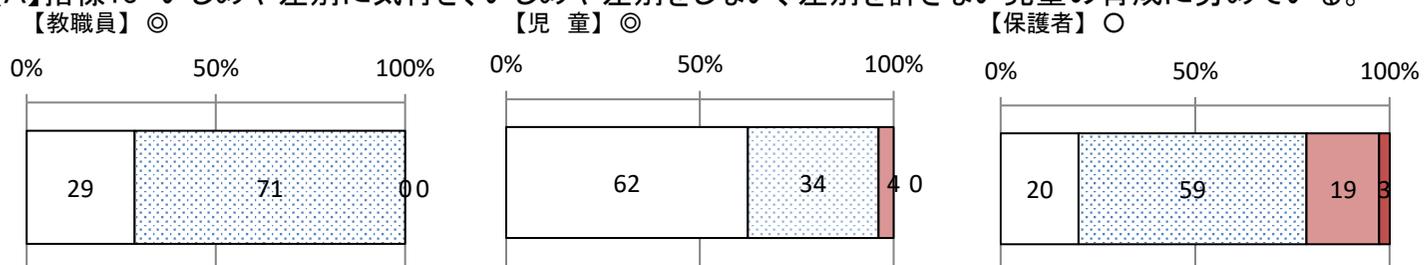
【分析】

8割を超える教職員、児童、保護者が健康で安全な生活を送っていると考えている。児童と保護者の積極的肯定意見は昨年度と同程度だが、教職員の積極的肯定意見は昨年度より24ポイント減っていることが課題である。

【改善方策】

昨年度と同様に、身体計測や検診、保健だよりや給食だよりなどの取組を通して、健康で安全な生活を送ることに対する児童の意識を高めていく。感染症対策については、今後も現在の取組を継続するとともに、行事を行う際には感染状況に留意しながら、しっかりとした対策に努めていく。

【A】指標13 いじめや差別に気付き、いじめや差別をしない、差別を許さない児童の育成に努めている。



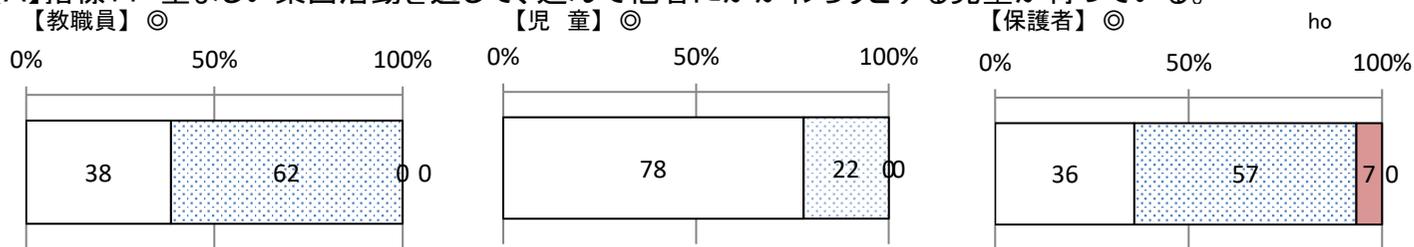
【分析】

全員の教職員がいじめや差別に対する指導を肯定的に捉えており、児童自身も96%がいじめや差別をしていないと答えている。しかし、保護者の21%は否定的に捉えており、教職員及び児童と保護者との間で大きな意識のずれが生じている。昨年度の結果に比べると保護者の積極的否定意見は4ポイント減少しているが、全体の割合に大きな変化はない。約2割の保護者は、いじめや差別に対する学校の対応に対して満足できていないと思われる。

【改善方策】

今後も「心のアンケート」や教育相談などを通して、いじめや個々の悩みの早期発見、早期解決に努めていく。また、道徳科や特別活動を中心として、思いやりの心情を育んだり、温かい仲間づくり・人間関係づくりを進めたりする学びを大切にしていく。さらに、保護者が相談しやすい学校の雰囲気づくりを心掛けるとともに、保護者に対して正確な「報告」と細かな「連絡」、親身になった「相談」を徹底し、家庭との連携を密にしながらいじめや差別に対応していく。

【A】指標14 望ましい集団活動を通して、進んで他者にかかわろうとする児童が育っている。



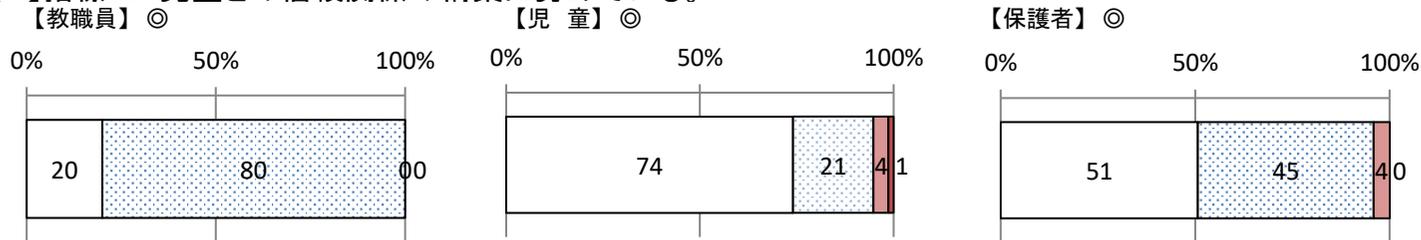
【分析】

教職員の全員が肯定的に捉えており、全教育活動を通じて集団活動を重要視していることが分かる。児童も全員が肯定的に捉えており、学校の様々な教育活動で他者との関わりに充実感を感じていると思われる。本年度になって徐々に学校行事や集団活動、ペアやグループでの学習が再開されてきたことが要因であると思われる。ただ、まだまだ完全再開というわけにはいかず、それが7%の保護者の否定意見として表れていると考えられる。

【改善方策】

学校では異年齢集団が互いに関わり合うことで、思いやり、協力すること、自主性、リーダー性などが育てられている。これからも、児童会活動や日々の清掃活動など、異年齢集団での活動の充実を図り、他に認められたい、自分のよさに気付いたり、達成感を感じたりすることを大切にしていきたい。

【A】指標15 児童との信頼関係の構築に努めている。



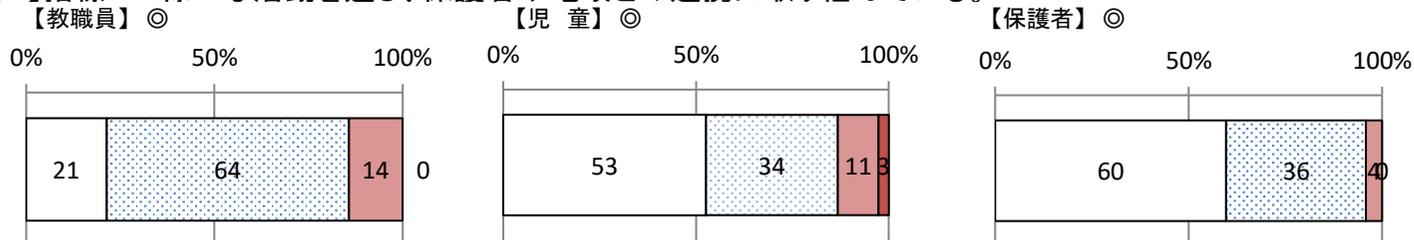
【分析】

教職員が児童との信頼関係の構築に努めようとしていることは当然のことである。また児童と保護者の積極的肯定意見も共に95%を超えている。この結果から教職員と児童・保護者の間に意識のずれは見られず、信頼関係がしっかりとできた上で教育活動が行われていることがうかがえる。しかし、一部の児童及び保護者は学校に対して否定的に捉えていることも見逃してはならない。

【改善方策】

基本的には現在の取組を継続していき、教職員と児童との信頼関係を維持していく。加えて100%の児童・保護者から信頼を得られるように、一人一人の特性を理解し、話をよく聞いて、児童に信頼される学校を目指していく。

【A】指標16 様々な活動を通し、保護者や地域との連携に取り組んでいる。



【分析】

児童の割合に変化はないが、肯定的に捉えている教職員は7ポイント減少、肯定的に捉えている保護者は6ポイント増加している。教職員は新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けて充実した地域学習が展開できていないことをもどかしく感じており、保護者は地域学習が再開されてきたことを歓迎しているという結果ではないかと考えられる。

【改善方策】

今後も地域に根差した特色ある教育を推進していくため地域学習の充実を図るとともに、様々な活動において保護者の協力を仰ぎ、保護者の力を教育活動に生かしていく学校づくりを推進する。そして学校運営協議会とともに学校・家庭・地域が一体となった「開かれた信頼される学校づくり」に一層努めていく。

【A】指標17 地域の人や来校者に温かく接したり、声を掛けたりして、学校に立ち寄りやすい雰囲気をつくっている。



【分析】

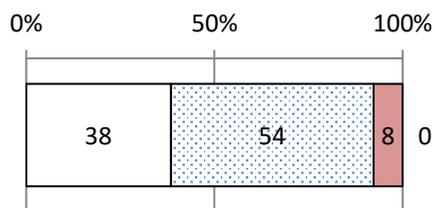
保護者の積極的肯定意見は13ポイント増加しているが、8%の保護者は否定的に捉えている。多くの保護者にとって学校は立ち寄りやすい雰囲気をつくっていると考えられるが、全員の保護者にとって立ち寄りやすい雰囲気があるとは言えない。

【改善方策】

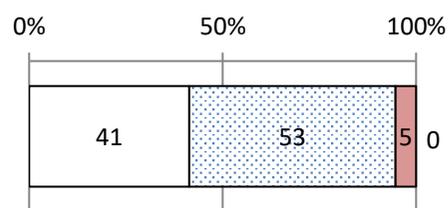
来校時の対応について保護者から一定の評価が得られていると考えられる。今後も、保護者を含め来校者に接するときは対応している自分自身が学校の「顔」であることを意識し、表情・言葉遣いに細心の注意を払うよう努めていく。

【A】指標18 学年通信やホームページ等で、学校の取組や様子を伝えることができている。

【教職員】◎



【保護者】◎



【分析】

95%の保護者が、学校は学年通信やホームページ等で学校の取組や様子を伝えることができていると考えており、一定の評価を得ていることが分かる。

【改善方策】

学校HP等を通しての情報発信については、多くの保護者や教育関係者の方から好評価をいただいております。今後も継続していきたい。マチコミメールのタイムラインを活用して修学旅行や自然の家での様子をアップしたところ、保護者に好評であった。タブレットを含めた新しい情報ツールについても全職員が使うことができるように研修を進めていく。